

# みめぐみの

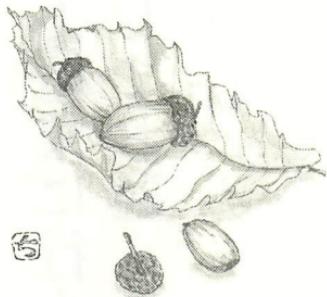
第8部





# みめぐみの

## 第8部



大谷光道著

目次

いよいよ極楽に行く、	1
そしてお迎えはどうなる？	2
最高級のお迎え···	4
九種類もある···	9
お迎えは地獄から？	12
お釈迦さまのお心は？	17
指定券が買つてあるから	
大丈夫！	21
読者の頁···	
感想／意見···	24
あとがき···	31

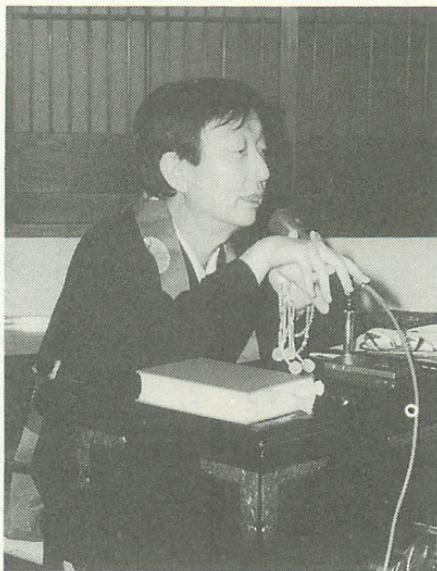
# いよいよ極楽に行く、 そしてお迎えはどうなる？

昨年は「どうしたら極楽に行けるのか」というお話をいたしました。

それでは、私たちが極楽に往生一字のごとく「行つて生まれる」と――するとき、はたして極楽からの「お迎え」はあるのでしょうか。

「弥陀来迎図」

「それ、何？」というお顔が、見えますね。では、『竹取物語』・かぐや姫



いよいよ極楽に行く、そしてお迎えはどうなる？

のお話、覚えていらっしゃいますか。最後のかぐや姫が月の世界に帰る場面。あたりが昼のように明るくなつて、たくさんの人人が迎えに来る場面を想い起こしてみてください。「かぐや姫は元々宇宙人で、宇宙船に乗つて大勢の人たちが迎えに来たんだ」などと、おもしろいことをいう人もありますが、人間の能力を超えた別世界の人たちが迎えに来たという意味で、うなづける点もあります。

極楽から阿弥陀さまが菩薩はじめ大勢の人たちを連れて私たちを迎えてくださるシーンが、「弥陀来迎図」です。来迎は「らいこう」または「らいごう」と読みます。これはただたんに「絵」だけのことで、だれかが空想したものをお絵に描いたものなのでしょうか。それとも本当に私たちの往生のときには、こんな立派な来迎があるのでしようか。

極楽に往生できるかどうかということは、私たちにとつてそもそも一大事です。それと同時に、来迎はどうなるのか。確實に往生できるということが

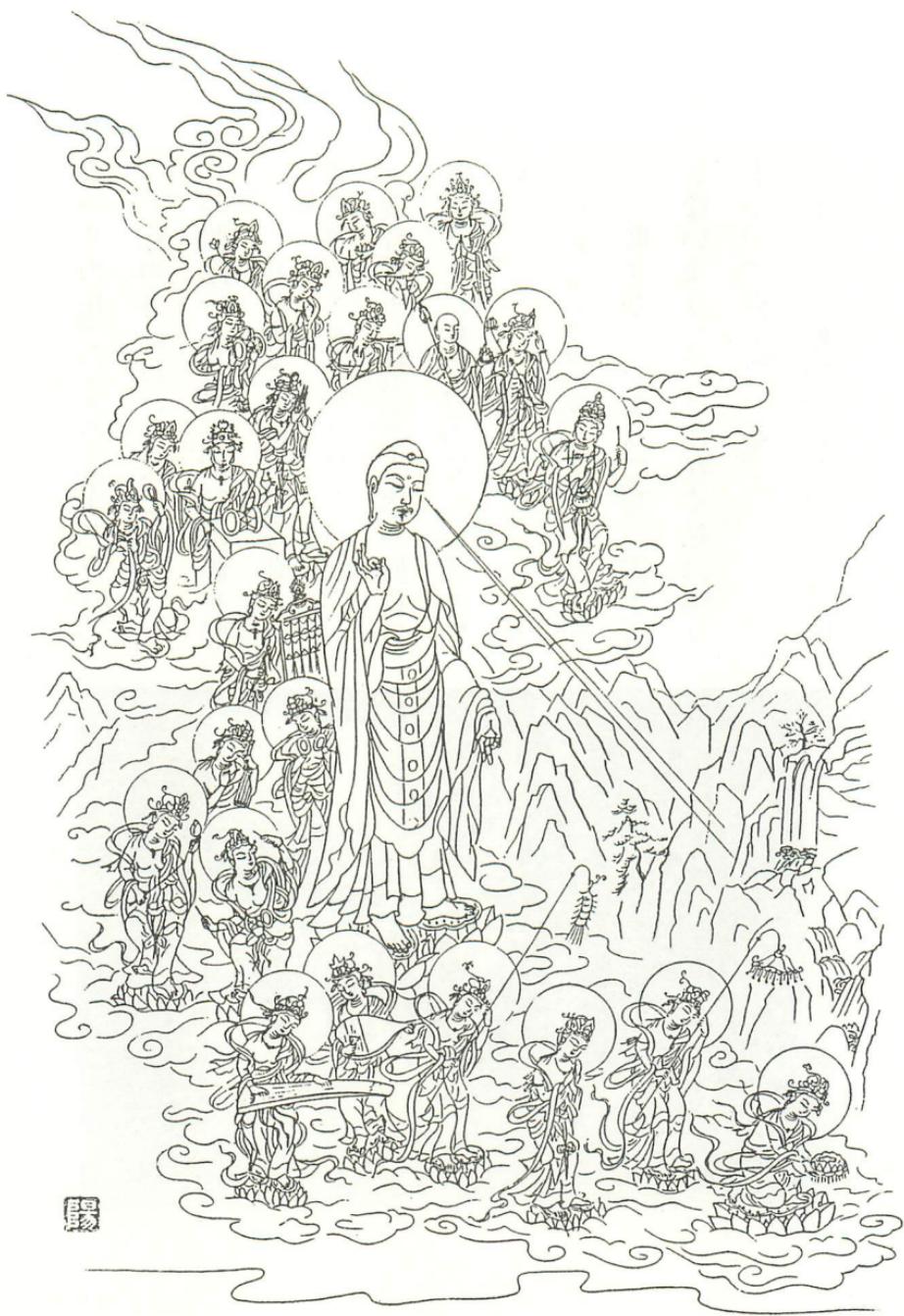
わかつたとしても、そのあかしとして、また見知らぬところへ行くことの不安を解消するためにも、来迎があるのかどうか、気になるところです。

## 最高級のお迎え

どこからともなく今まで聞いたことのないような心地のよい音楽が聞こえてくる。あたりがだんだん明るくなつて、まばゆくて目があいていられないくらいになつてきた。

人間のようだけどまぶしくてよく見えない。そうだ、阿弥陀さまなんだ。両わきには觀音さま（觀世音菩薩）、せいいし勢至さま（大勢至菩薩）。と思えば、数限りない仏さま、百千の極楽の住人たち、そして無数の諸天（仏教の守護神）が、すばらしい宝石でできた御殿とともに降りてこられた。

あつ、觀音さまが勢至さまと一緒にダイヤモンド（金剛）の蓮華台



(バスの花でできた台座)を持つて、私の方においでになる。

阿弥陀さまの後光<sup>ごこう</sup>が私の体を照らし、菩薩方と共に金色に輝く御手で私の手をお取りになつた。

観音さまと勢至さまは、無数の菩薩と共に私をほめてくださつてゐる。

いいようもなくうれしいような、恥ずかしいようで身の置き所がないような、とにかく私は躍り上がつて喜んでいる。

あれつ、私のからだがいつの間



にかさつきの金剛の蓮華台に乗ってしまっているではないか。

阿弥陀さまの後に従つてていると思う間に、表現しつくせないすばらしい世界に来てしまつていた。ここが極楽なんだ。

阿弥陀さまのお姿のなんとすばらしいこと、また菩薩方のお姿の立派なこと、言葉では言い表せない。光を出す宝石でできた木々がいいよもなくすばらしい教えを説きのべるのを聞いて、不生不滅（生ずることも滅することもないこと）を覚つてしまつた。

極楽からは、わずかの間にあちこちの仏さまの国を巡つてお供えをし、そこでつぎつぎと覚りの証明をいただき、ふたたび極楽に戻つくるという楽しさ。今から無量百千の教えを聞いて、それを身につけるようになるのだそうだ。

これは『觀無量壽經』（かんむりょうじゅきょう）（略して觀經）といふお経の一部で、最高級の来迎を受けた人の書いた手記のようにして意訳してみました。私が下手な口語訳

をするより原文（漢文）の方がはるかに深いものがあるのは当然です。

そこで、往生するときはだれでもこのような来迎を受けられるかと  
いふと、

まことで深い心をもつて、良い行いをしてそれを極楽にふりむける心  
を起こすことはもちろん、慈しみの心を持って生き物を殺さずいろいろ  
な戒律を守るとか、『華厳經』けいごん や『法華經』など大乗の經典を読誦（読みじゆ）（讀  
經）するとか、または六念法という修行をしなければならない。

という、条件が付いています。

これから外れていると、往生の仕方がまるつきり変わってきます。来迎の  
立派さもさることながら、往生してから後、完全な仏の覚りに到達するまで  
の経緯や修行の期間がまるで違うということです。

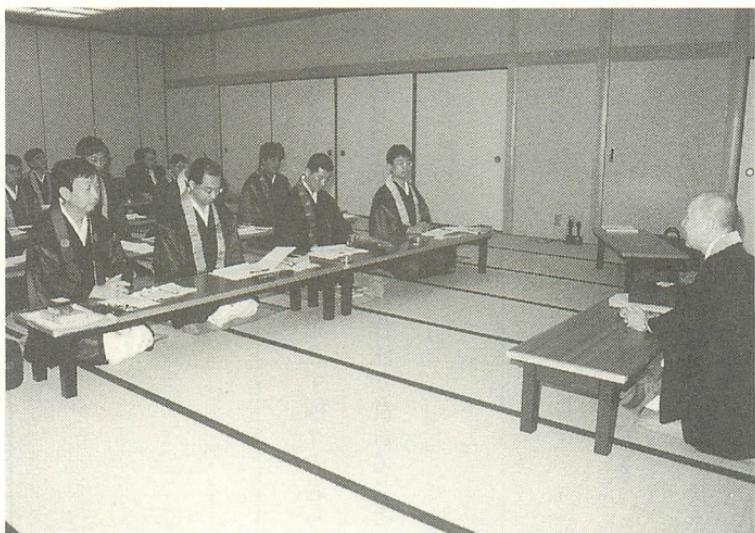
『觀經』ではこの後、往生しようとする人の今までの修行のあり方と、そ  
れに対する往生の様子や往生してからのことが詳しく説かれています。

その一々を細かく見ていくわけにはいかないので、概略だけをお話ししましょう。

## 九種類もある

今お話しした最高級の往生を「上品上生」といいますが、これにはじめとして、だんだん下へ九段階あります。

往生する人の状態を三つに分け、上から上品、中品、下品、さらにそれぞれを三つに分け、上生、中生、下生です。



		上品
		(大乗の善) 中生=究極の真理をよく理解し、因果の理を深く信じている 下生=因果の理を信じ、ただ無上の菩提心を起こす
下品	<p>(小乗の善)</p> <p>上生=五戒を受け八戒齋その他の戒律を守り、五逆罪を犯さず種々の過ちがない 中生=一日一夜八戒齋、沙弥戒または具足戒をたもち、作法が乱れることがない (世間の善)=下生=親孝行をし、慈しみ思いやる心を持つ</p> <p>上生=種々の悪業を作つて恥じる心がない 中生=五戒、八戒、具足戒を犯す。悪業をむしろ自分の売り物にしている (惡)=下生=五逆・十惡という罪を作り、その他ありとあらゆる悪をなす</p>	上生=右の通り

いよいよ極楽に行く、そしてお迎えはどうなる？

上品は大乗仏教を志す人のことで、同じ上品の中でも下に行くほど来迎の仏さまたちは少なくなり、往生してから完全な仏の覚りに至るのに時間がかかるつてしまします。

中品の上二つ（上生、中生）は小乗仏教（自分の成仏のみを優先させて、他人をも成仏させようとする菩薩行に欠ける教え）で戒律を守っている人が来迎を受けて往生しようとする場合で、当然のことながら上生の方が中生より厳しい戒律を守らねばなりません。極楽に往生してまず阿羅漢の覚り（小乗）を開くのですが、上生は往生してすぐ覚るのに対し、中生は半劫の修行が必要です。「一劫」は前にも寿限無さんのお話しましたが、ずいぶん長い時間のことです、半劫はその半分です。

次は下生。これは仏教に関係のない一般の、世間でいう良い行いをしている人のことです。親孝行であつたとか、人に親切をしていたとかという人で、これは仏教徒ではないので、臨終にあたつて善知識（ぜんじ（ち）しき）（お念佛を勧める

人、教えてくれる人）に会つて、その説法を受けなければなりません。極楽に生まれて、一小劫を経て阿羅漢の覚りを開く。だから中生よりももつと長い期間向こうで修行をしてから覚ることになります。

## お迎えは地獄から？

似たような話で恐縮ですが、今度は一番下ですね、下品。これもまた三段階あつて、これは今まで悪いことをしてきた人ばかりです。来迎にはほど遠い、それどころか地獄行きの人。地獄へ行くのにお迎えがあるのか。それもありますが、「地獄へ行かなくてすませるには……」（笑）、ということです。

上生は、色々な悪業（悪い結果を招く行い、悪い行い）を重ねて恥じる心がない。しかし、臨終の時に善知識がお経の題をほめるのを聞く、それだけでもこの人が一千劫の間積んできた悪業が除かれる。そこで善知識はさらに

教えて合掌させ、南無阿弥陀仏を称えさせる。そうすると五十億劫の罪が除かれるというものです。

この場合は阿弥陀さまは「化仏」<sup>けふつ</sup>とあるので、阿弥陀さま代理とでもいえましようか（笑）。そして、觀音さま・勢至さまの、それも化觀世音・化大勢至ですから、これもお代理がおいでになつて迎えてくださる。この下品上生に限らず、極楽へ行くときは蓮華に包まれて、カブセルみたいなもので、しゅつと極楽へ行くわけです。蓮華は四十九日で開きますが、十小劫を経ていろんな仏法を覚るようになる。地獄へ行かずにはみませんでした（笑）。

それから中生。これは種々の戒律を犯し、教団の物や僧に供養されたものを盗む。<sup>ふじょう</sup>不淨説法して恥ずかしいと思わない。悪業をむしろ自分の売り物にしている。

これはどうも我々坊主のことを言われているようで……（笑）。不淨説法といふのは、「きよらかでない説法」のことで、何も「いやらしい題材を使つ

た説法」という意味ではないですよ（笑）。お金を目当てにとか、自分の名譽のためにする説法のことです。

この「説法」に限らず、仏教で「きよらか（淨、しょうじょう清淨）」といえば、「他人のためにあらゆる努力を惜しまず、しかも”……してあげた”」ということだわりを持たないことです。

本題に戻つて、悪いことをしてきたから、臨終に当たつて地獄の火が「お迎え」に来る。その時に善知識が大慈悲をもつて阿弥陀さまのすばらしさを説くのを聞いて、八十億劫の罪が除かれる。地獄から迫つてくる火が今度は清く涼しい風に変わつて天の花を吹き、その花の上においてになる化仏・化菩薩がお迎えくださつて、一瞬にして往生する。その後六劫を経て花が開く、とあります。

それから一番下ですね。下品の下生。これはもつとも重い十惡・五逆、その他ありとあらゆる罪を犯した人。五逆というのは、父を殺し母を殺し、阿

いよいよ極楽に行く、そしてお迎えはどうなる？

羅漢（ここでは、仏道修行をする人）を殺し、仏の体から血を出させる、教団の和を破る、ですね。

今までありとあらゆる悪いことをしてきたので、地獄に行き苦を受けること窮<sup>きわ</sup>まりないはずです。臨終の時に善知識が色々慰め説法し、仏を念ずるように勧めるなんけれども、苦しみに攻められて仏を念ずる暇<sup>ひま</sup>がない。「それだったらただ口に無量寿仏と称えよ」と教えられたので、



声が途絶えないようにして口で十回、南無阿弥陀仏と称える。すると一声ごとに八十億劫の罪が除かれていく。これは仏さまの来迎はなくて、金色の蓮華の花びらが日光のように見えて、一瞬のうちに往生する。この場合は十二大劫という、上の八つのどれよりも長い時間を経て花が開く。極楽に行つてからもずっと蓮華の中にいるので、極楽に行つたような思いはなかなかできないんですね。そういう往生をする。

上ほど立派な来迎があるし、下ほどお粗末（笑）。下の方でも往生はできるけれど、長い間修行が必要……。「立派な来迎を受けて、往生してからもよりすばらしい境地に居たい。」そうは思うけれども、自分自身を顧みた場合に、一体どれに当たるのかな。考えれば考えるほど、だんだん、だんだん目が下の方に行つてしまふ。「このあたりかな、ああ、でも、これしか無理かなあ」（笑）、となつてしまふ。皆さんは、どうですか。

## お釈迦さまのお心は？

でも、ここで溜息ためいきをつく一方で、下品上生や下品下生のように勧められるまま念佛すれば、何かすつとするような、助かるような気がしませんか。下へ行けば行くほど不思議とお念佛が出てくるはずです。

昨年お話した定善じょうぜんや今日の散善さんぜんのように自分で自分を励ます自力の修行のことを、念佛に対して「諸行しよぎょう」といいます。『観経』は表面では諸行往生が説かれていますが、むしろその諸行がいかに難しいかを私たち凡夫に知らせるために説かれたもので、それが証拠に、このお経の最後には「無量寿仏なまよしふぶつ（阿弥陀仏）の名を持たもて（心にとどめよ）」と念佛が勧められているのです。

なぜこのようなまどろっこしいことがなされているかというと、はじめから「南無阿弥陀仏を称えるだけでいい」などと言われても、簡単すぎてかえつてわかりにくい。それより自分の努力で良い行いを積み重ねて、それによ

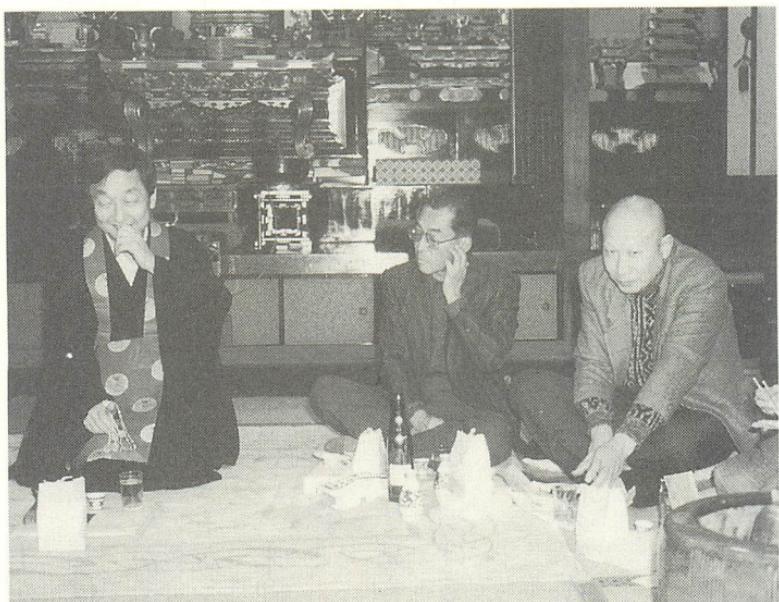
つて良い結果（覚りを開く、来迎を受けるなど）を受けるということの方がわかりやすいでしょう——頭ではですが——違いますか。このようにわかりやすく諸行という入り口を作つて、私たち凡夫を念佛に導くのが『観経』を説かれたお釈迦さまのお心です。

元々、弥陀の淨土（極楽）は阿弥陀さまが法藏菩薩であられたときに建てられたご本願（四十八願）<sup>しじゅうはちがん</sup>が、私たちの考えの及ばないほど長い間のご修行によつて成就（完成）してできたものです。このご本願を一言で言うと「凡夫を救うのが主であつて、難しい自力の修行を必要とするものではなく、いや、修行のできない者のために、信心一つで往生できる」、そのように成就されたものなのです。つまり、「極楽があるということがセットになつていて、（行く）には信心によるということがセットになつていて、『極楽と自力の修行とはセットになつていない』ということです。たとえていうと、空港と飛行機はセットですよね。「空港に着陸するのは飛行機であ

いよいよ極楽に行く、そしてお迎えはどうなる？

つて、電車ではない（笑）」といふことと同じです。「信心をいただいて念佛する、修行の及ばない凡夫が、最優先で往生するところ」が極楽なのです。

「信心による」といつても抽象的でわかりにくいのですが、信心というのは「仏さまよりいただいた心」「仏の心」、私流にいうと「阿弥陀さまに惚れた心」で、自然に南無阿弥陀仏が口からあふれる状態です。そしてこの心は臨終——まさに臨終、死ぬ時——を



待つのではなく、日常（平生）<sup>（へいせい）</sup>の生活の中で知らず知らずのうちにでき上がる心です。それでこれを「臨終來迎」に対して「平生業成」<sup>（ぜうじょう）</sup>といいます。信心によつて極楽に往生できるということは、信心の定まつたとき、「やがてこの世での命が終わつたとき——必ず極楽に往生する私“ができ上がるてしまう」ということです。ですから、来迎にこだわらなくともいい、来迎は「あつてもなくともいい」ことになり、これを「不來迎」<sup>（ふらいこう）</sup>といいます。

これに対して、臨終に来迎を期待するということは、角度を変えて見ると、「臨終の時まで極楽に行けるかどうかわからない、臨終に来迎を受けて始めて往生できることが間違いないことになる」といえます。

平生業成の教えは浄土真宗の大きな特徴で、同じ浄土の教えでも他の宗旨ではおつしやいません。

「平生業成」の内容は親鸞聖人の説かれたところですが、この用語を初めて使われたのは、本願寺第三世覺如上人<sup>（かくじょ）</sup>です。覺如上人は第八世の蓮如上人

ほどには知られていませんが、本願寺のあらゆる基礎を築かれたお方、わかりやすくいえば事実上本願寺を作られたお方です。来年は六百五十回忌、ご正当は一月十九日です。

## 指定券が買つてあるから大丈夫！

皆さんは、旅行の計画を立てると切符の予約をなさるでしょう。同じことなら早い目に指定席を買っておいて間違いないなくその列車に乘ろうとするし、そうすれば目的地まで座つていけること、間違はありません。発車直前に自由席の切符を買って飛び乗ろうとしても、満員であれば乗れないことすらあります。

浄土真宗における信心は、そのまま極楽行きの指定席券なのです。臨終に来迎があろうがなかろうが、極楽に間違いなく行けることが決まってしまっているのです。命が終わると同時に、すぐ極楽に生まれて、すぐ覚りを開

く。それが私たちのなんまんだ仏ですね。もちろん平生でご信心が決まらない場合は臨終に決まつても、それでも行けるんですよ。それでもかまわないけれども、できたらやつぱり、平生に決めておいていただきたいと思います。なぜかとすると、信心をいただいてから後の生活が違つてくるからです。「この世でのいいこと」があるんです。

これについては、またの機会にお話いたしたいと思います。

最後に宗祖親鸞聖人の『末燈鈔』<sup>(まつとうしょう)</sup>を味わつていただきたいと思います。

来迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆゑに。臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべし、いまだ真実の信心をえざるがゆゑなり。また十惡・五逆の罪人のはじめて善知識にあうて、すすめらるるときにいふことなり。眞実信心の行人は、攝取不捨のゆゑに正定聚の位に住す。<sup>(じゅう)</sup>このゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心の定ま

いよいよ極楽に行く、そしてお迎えはどうなる？

るとき往生また定まるなり。来迎の儀則ぎそくをまたず。

編集部註 || 『みめぐみの』第五部「どうしたら極楽に行けるのか」参照



感想  
意見

京都府 南 斎子ときさん

いつも、先ず、表紙の絵の美しさに心の安らぎをいただきます。  
そして光道様のご法話を読ませていただきますとこの表紙の絵がぴったりで、  
さすが、と感じ入っております。

第七部では特に二十九二十一頁には、今、現在、親鸞様がここにいて下さる様で、心から解放されるよろこびを感じました。

毎号、くり返し拝読しますが、第七部は、仏光寺の末寺で育ちました私にとりましては特別のよろこびでございます。

愛知県常滑市 中山幸枝さん

つい、二、三年前見た夢のようなのですが、一寸身体もくずしていた時のことです。空と地面の中間を、とんで居りますと、目の前に金ぴかの、まぶしい位の大きな佛壇が、何百も見渡すかぎり並んで居りました。

私は、其の金ぴかの中へ入りたくて何回も何回も廻つて居りましたが、その前には金網が、ずっと張りつめられていて、どうしても中へ入る事が出来ず仕方なく歸つてきました。目が開き、これは夢かぞくに言う、まぼろしか、又本当な

のか、極楽浄土と言う処はあの様な処か、未だにその時の事が忘れられなく毎日を暮らして居りますが、全く夢ではなかつたよう位思えてなりません。何とか良い教えを御願致したく思います。

愛知県知多市 岩下藤子さん

この度、第七部を読ませてもらつた時、私は大変自分自身が身も心も落込んでいた時でした。でも又何とか立ちあがつて、生きる元気を出して頑張ろうと思いました。お手次のお寺に行き色々と話しう聞いて頂き又生きる気持に成りました。自分をみうしなつた時は仏様に頼り助けて頂き話を聞いてもらう事で又前向きに成りました。有りがたいと思いました。



北海道美唄市 斎藤政勝さん

『みめぐみの第五部』より

東京都 山崎きみさん

業に付きまして過去・現在・未来は切りはなす事は出来ませんね。過去、未来は知るよしも有りませんが、現在を反省おわびをし現在正しく人の道・善徳をわきまえ日常生活に報恩感謝し、御仏の御心に添ふよう喜びも悲しみも念佛を申し私は未来に向ひ努力をさせて頂きます。

御仏の心偶凡人の心一日の間くり返へし気が付き申し訳なく念佛を申させて頂きります。

お恥ずかしい次第でござります。九十一才の為私の思いを乱筆乱文にておゆるしください。

富山県 匿名希望

阿弥陀様の行をお示し下され有難う御座いました。悲しむべきは名、利、勝他だと思ひます。私寺に居て思ふ事は真宗門徒と名乗り乍ら名、利、勝他の蓄積のような私寺は火災を起し焼失しても当然なのに現在まだ存在しゐるのは阿弥陀如来さまの御蔭なのだと喜び居ります。今後は聖人の御教えに相応した坊舎にし度いと念じて居ります。

これによつて思い出されるのは蓮如上人御文様一帖目十二の一、

抑年来超勝寺の門徒において仏法の次第もつてのほか相違せりそのいわれはまづ座衆とてこれありいかにもその座上にあがつてさかづきなどまでもひとよりさきにのみ座中のひとにもまたその外たれだれにもいみじくおもはれんずるがまことに仏法の肝要たるよう内心中にこころえをきたりこれさら往生極楽のためにあらずただ世間の名聞ににたり……

金沢市 竹内八千代さん

華咲いて

實が成つて

種こぼれたり

ナンマンダ佛

## あとがき

みめぐみの刊行委員会

聞きたい御法は、解った様で忘れがちです。しかし、それはそれで良いのかもしれません。

二度も三度も、人生の意味を考えながら、私の想像をふくらませて読みこなすことによつて、ありのままの自分の姿に出会うことができる事実です。

そして、読むごとに、疑問を持つてハガキを投函して下さい。それがあなたをお育て下さる為の大きな意味を持ちます。

時代は、今、大谷光道様を待つっていたのです。今、先駆けとなつて御縁を持たれたあなたは、このお宝をまわりのひとりでも多くの方に紹介してあげて下さい。

各部とも、増刷していくつでも対応できるよう準備しております。ご利用をお待ちしています。

※折り込みハガキをご投函下さる際には、切手は不要です。

※FAXは、〇七五（三五一）三一二〇（みめぐみの刊行委員会）へ。

## みめぐみの 第8部

---

1999年11月5日 印刷  
1999年11月10日 発行

定価 200円

著 者 大谷光道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754  
-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120  
振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株)中外日報社

---



